

ゆりかもめ駅文様の紹介



新橋：柳縞文様（やなぎじまもんよう）

柳の葉を抽象化して縞模様にした文様です。柳は古来より縁起の良い陽木として日本人に親しまれていました。江戸時代の「花暦」では一月・松、二月・梅、三月・桜、四月・藤、五月・菖蒲（しょうぶ）、六月・牡丹（ぼたん）、七月・萩（はぎ）、八月・薄（すすき）、九月・菊、十月・紅葉、十一月・柳、十二月・桐（きり）と、十一月を表す植物となっています。



汐留：葦文様（あしもんよう）

河辺に群生している葦を意匠化した文様です。葦は、日本古来の植物で、最古の歌集である万葉集に数多く詠まれています。また、葦で作った葦矢は邪気を祓（はら）うといわれており、現在でも正月の縁起物である破魔矢に用いられています。



竹芝：鱗文様（うろこもんよう）

三角形を連続して構成し、鱗（うろこ）に見立てた文様です。能や歌舞伎の衣装に多用されています。鱗文様といえば、北条家の家紋である「三つ鱗」が有名です。「太平記」によると鎌倉幕府初代執権・北条時政が江ノ島弁財天に参籠（さんろう）したときに大蛇が現れ神託を告げ、三枚の鱗を残したことに由来しているようです。



日の出：日足散らし文様（ひあしちらしもんよう）

雲の切れ間からさす太陽の光を意匠化した日足（ひあし）紋を散りばめた文様です。日足紋は様々な形があり、家紋にも用いられています。戦国時代には肥前の龍造寺氏や大村氏、江戸時代には鍋島氏など、北九州の武将に広まっていたようです。



芝浦ふ頭：露芝文様（つゆしばもんよう）

芝草と朝露を意匠化した文様です。ふすまや手拭い等に様々な意匠の露芝が用いられています。この芝草とは、サッカーグラウンドなどで使われている西洋芝とは異なり、古くから日本に野生している芝、「野芝」のことです。



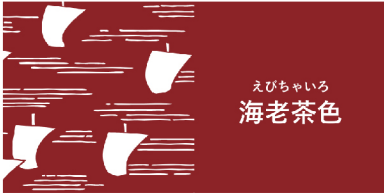
お台場海浜公園：老松文様（おいまつもんよう）

樹齢を重ねた老松（おいまつ）の枝を意匠化した文様です。竹や梅と並ぶ目出度いものとして人気があったようで、ふすま紙などに用いられていました。また、老松は能舞台の背景である鏡板に描かれていることで有名です。これは、春日大社一の鳥居にある影向の松の下で神事芸能が行われたことに由来しています。



台場：大波文様（おおなみもんよう）

波を意匠化した文様の一つです。四方を海に囲まれた日本では数多くの波文様が作り出され、着物・布・蒔絵（まきえ）・和紙・陶器などあらゆるものに用いられています。波に関する言葉も荒波・細波（さざなみ）・夕波など数多くあり、高低のある高いほうの波を男波（おなみ）、低いほうの波を女波（めなみ）と呼ぶ擬人化した表現もあります。



東京国際クルーズターミナル：帆掛け舟文様（ほかけぶねもんよう）

水面に浮かぶ帆（ほ）掛（かけ）舟（ぶね）を描いた文様で舟は帆のみを象徴的に描いています。帆掛け舟は海の向こうから富を運んでくるということで、おめでたい文様として用いられていました。初夢で枕の下に敷く宝船の絵は江戸中期からのもので、当初は七福神はおらず帆掛け舟に金銀米俵を積んだ絵に回文歌が書かれたものだったそうです。



テレコムセンター：蝙蝠文様（こうもりもんよう）

柳群がって飛ぶ蝙蝠（こうもり）を意匠化した文様です。蝙蝠は読みが「子守」に通じることから、喜ばしい文様として江戸時代に人気があったようで、蝙蝠を題材とした文様が数多く作り出されています。また、中国では蝙蝠の「蝠」が中国語の「福」の発音と同じであることから、幸福の象徴として様々な意匠に用いられています。



青海：青海波文様（せいがいはもんよう）

波を表す文様の一種です。平安時代に舞楽「青海波（せいがいは）」の衣装に用いられていたことからこの名がついたといわれています。元禄時代、江戸の蒔絵（まきえ）師・勘七が青海波文様を得意として盛んに描き、「青海勘七」と称せられていました。様々な工芸品に描かれて、大変流行したようです。



東京ビッグサイト：桜文様（さくらもんよう）

桜の花を描いた文様です。桜の花というと染井吉野（そめいよしの）だと思われる方が多いのですが、染井吉野は江戸時代末期に染井村（現・豊島区駒込）の植木屋が大島（おおしま）桜（ざくら）と江戸（えど）彼岸（ひがん）をもとに品種改良した園芸品種なので、この桜は別の品種だと思われます。花弁が五つであること、葉がなく花だけの文様であることから、葉がでる前に花が咲く江戸彼岸を題材にしたのかもしれませんが。



有明：獅子文様（ししもんよう）

獅子（しし）のたてがみを題材にした文様です。この獅子は想像上の動物で、悪疫や災禍を払う霊獣だといわれています。別名を唐獅子（からじし）と言うのは、猪（いのしし）や鹿（しし）と区別するための呼び名です。有名な牡丹（ぼたん）との図柄は獅子が牡丹を愛していたという故事からきており、能の「石橋」ではその姿が勇壮に表現されています。



有明テニスの森：干潟に水鳥文様（ひがたにみずどりもんよう）

干潟を飛び交う水鳥（みずどり）を描いた文様です。水鳥の姿と干潟の潮溜りや砂を簡素に表現しています。水鳥とは水上や水辺で生活する鳥の総称です。ちなみに水鳥を「すいちょう」と読むと、お酒の異名になります。これは「酒」という字が水を表す「氵」と十二支で鳥を表す「酉」とで構成されているからです。



市場前：変わり縞に蟹文様（かわりじまにかにもんよう）

牡丹（ぼたん）の花を模した蟹（かに）と山形の縞（しま）を組み合わせた文様です。牡丹の花と葉の形を蟹に見立てた「蟹牡丹」とは異なり、牡丹の花にも蟹にも見える意匠になっています。牡丹の花は富貴の象徴であり、蟹の甲は魔除けになるといわれていたことから、この二つを組み合わせで縁起の良い図柄にしたと推察されます。



新豊洲：算盤縞文様（そろばんじまもんよう）

算盤（そろばん）は室町時代末期に日本に伝わった計算器具です。これを用いた計算方法が江戸時代に入ると一般庶民に広く普及しました。江戸の町人文化が花開いた頃、この文様が作り出されたそうです。町人好みの小粋な柄として流行し、浴衣（ゆかた）や半纏（はんてん）、手拭（てぬぐい）などあらゆるものに使われていました。



豊洲：水に雨龍文様（みずにあまりょうもんよう）

雨竜（あまりょう）とは想像上の動物で龍の一種です。天に昇って雨をふらせる竜で、めでたい前兆をもたらす幸運を呼ぶといわれています。雨竜といえば、「雨竜の殿様」といわれた越後長岡の九代藩主・牧野忠（ただ）精（きよ）が有名です。「雨竜百態」などの様々な雨竜の絵画を描き残しています。

